

ヤスクニ・レポ 187

戦後70年の今を問う

—国会とは何か

代表 西川重則

1

ヨーロッパの神学者のひとり、カール・バルトが、神学者として、新聞を熱心に読み、神学を深く考え、学びを深めたことはよく知られている。少なくとも私がプロテスタントの出版社(勤務も長かった)の編集部のひとりとして休むことなく任務に励んでいた時、カール・バルトについて述べたようなことを先輩から聞かされていた。

ひるがえって、戦後70年の今年、カール・バルトのことを思い出し、私は彼に負けないほど新聞をよく読み、神学的・信仰的な思いを持ち、私たちの教派にふさわしい教会形成・伝道の働きに力を尽し、伝道集会には知人・友人を伝道礼拝にお連れするよう努力している。

一方、日本の戦後史の総括の緊急性・重要性について、講演その他の機会に訴えつづけているが、その時、私もカール・バルトと同じ発想で、毎日の新聞をよく読み、いわゆる社会通念として多くの主権者・有権者が日本語として使われている言葉を間違えて使っていること、そしてその結果、想像以上の弊害を社会に及ぼしていることに気づかされ、その解決の難しさに困っている。

同じ問題についてすでにレポートで報告したが、事柄の重要性から、次のような端的な事例を改めて紹介しておきたい。「追悼」と「慰霊」の区別ができないマスコミの具体的事例である。「朝日新聞」、2015年4月4日、土曜日の朝刊である。「天皇皇后両陛下、8日からパラオ訪問」という大きな見出しに続いて、記者が次のように報道している。

「戦後70年にあたり、天皇、皇后両陛下は8～9日、太平洋戦争の激戦地・パラオ共和国を訪れる。『先の大戦によって命を失ったすべての人々を追悼し、遺族の歩んできた苦痛の道をしのび、世界の平和を祈りたいと思います』。2005年、

戦後60年のサイパン訪問を前にそう語っていた天皇陛下、戦没者を慰霊し、平和を願い続けてきた両陛下の歩みを振り返った」。

以上の「朝日新聞」のパラオ訪問の解説文は長文であり、ここで報告はできないが、右の解説の中に、天皇の場合は、天皇の言葉として、「追悼」が使われ、一方記者の解説の場合は、「戦没者を慰霊し……」と書いている。そして、その解説・報道についてのより大きな見出しには、「戦後70年 慰霊の旅果てなき祈り」と書かれている。

ここで率直に言えば、今の天皇は少年時代に尊敬に値する憲法学者と家庭教師としてアメリカから招かれた方から、ひとりの人間であって欲しいという教育を受け、成長して、今日に至っていると言えるが、とくに言葉の使い方については、右に述べた「追悼」と「慰霊」の区別は驚くほど明確に区別をし、私の知る限り、(8・15)の戦没者追悼式の場合はもちろんのこと、一度も「慰霊」の言葉を使ったことはない。言葉は思想と深く関わっており、そのことを天皇はよく知っていて正確に区別していると思っている。なぜマスコミがそのようなことに留意しないのか、私は不思議に思っている。

2

次に報告し、読者の方々にも、改めて戦後史の総括の重要性に気づいていただきたいと願っているが、次の事例は戦後史の総括と不可分の関係があるが、事例そのものは戦前・戦中に深く関わっている事例であることを強調しておきたい。次の事例は、「東京新聞」、2015年3月19日、木曜日、朝刊に報道されているが、驚くべき事例である。大きな見出しは「八紘一宇国会質問」と書かれている。本文の解説の見出しは、「世界を一つの家と見立て天皇が統治」・「満州」支配で理念復活と書かれている。質問

者は三原じゅん子議員（自民党）であり、2015年3月16日、参議院の予算委員会での質問の中で強調された時に、解説され、強調された「八紘一宇」であり、「東京新聞」の記者は私と電話などで話し合い、知り合いのすぐれた記者の一人である。

「八紘は八方の地の果て、つまり世界のこと。宇は家のことだ。天皇が世界を一つの家と見立てて統治しようとの理念が示された」と解説している。私も戦争が始まって、旧制の県立中学校で、校長などから、「八紘一宇」の精神を教えられた。天皇制国家神道体制の下、徹底した「天皇を中心とした神の国」日本による大東亜共栄圏構想が力説され、中国を始めアジア支配の天皇制国家神道体制にあって、自衛戦争に命を捧げる教育を疑うことなく受け、アジアの国々に対する侵略・加害の事実を知ることなく成長するわたしたちであった。

三原じゅん子自民党議員が何と戦後70年に良識の府の参議院と言われる国会の予算委員会で、「八紘一宇」についてくわしく説明したのには驚いたものである。

「東京新聞」はなぜか、最近私に取材し、写真で私を読者に紹介し、私のコメントをかなり精しく書いてくれるが、要するに、日本が長期にわたって、

朝鮮に対して「植民地支配」を行い、中国などに「侵略」「加害」の歴史をくり返した歴史の事実に基づく歴史認識の共有を重視していることを知っている私のコメントの報道だろうと思っている（今年の2月1日の朝刊を読んで下さればと思っています）。

ともあれ、三原じゅん子議員の質問を私は直接傍聴して、驚くべき質問の問題点を知らされただけに、今後の重大な課題のひとつと考えている。記者は、「戦後70年の国会で、こうした言葉が飛び出すとは思いませんでした。……参院予算委員会で『日本が建国以来、大切にしてきた価値観』と紹介した。この言葉は、戦前・戦中の日本のアジア侵略を正当化する標語として使われた。発言後、自民党内、国会でも大きな騒ぎにはなっていない。その静けさが問題の根深さを示唆している」という記者の批判を私も共有したい。

「八紘一宇を『軍国主義、過激ナル国家主義ト切り離シ得ザルモノ』として公文書での使用を禁じた」一九四五年の時点で占領していた当時の連合軍総司令部（GHQ）のことを併せ報告して、戦後七〇年の現状の一端を述べて終りたい（2015・4・14）。

2015年3月20日例会奨励 歴代誌第一29章1～9節「真に仕えているか」 須田毅牧師（日本福音教会連合西堀キリスト福音教会）

二、三十年前のキリスト教会の社会的課題に対する取り組みと現在の取り組みは変化していると感じる。福音は変わらず、主イエスにある平和に対する私たちの理解はあまり変化していないが、その福音に応答する生き方を実践する場である日本社会がキリスト者にとって厳しくなっているゆえに、取り組み方が変化しているのではないかと思わざるをえない。自らの信仰を、今までになく反省せざるをえない思いが強くなる近年である。

歴代誌は、バビロニア捕囚後に神の民のアイデンティティを確認すべく改めて歴史を学んでいる、反省の書でもあるように思う。この29章でダビデは、

自分が神殿建設を神によって許されていないのに、多くをささげることを喜んでいる。5節の「手にあふれるほどささげる」という語は、通常、「(祭司が)任職する」と訳される。このダビデの献身的なささげものについては列王記にはない。捕囚から帰った民がダビデ王を思い起こし、そしてその献身に倣う志を、ここに強調しているかのようである。背信を悔い改めて神のために生きる献身は、多くをささげ、全てをささげることを喜びとするのである。そして、それは本来、神から出て神に帰るのである(14節)。もともと神に救われた者として、神に帰るに過ぎない献身在、今、問われているのであろう。